

さいゆうしゅうしょう
最優秀賞

ちゅうがくせいいくぶん おきなわけんちじしゅう
中学生区分〈沖縄県知事賞〉

たす あ たいせつ
助け合うことの大切さ

みやこしましりつにしべちゅうがっこう
宮古島市立西辺中学校 二年

たから みくる
高良 光伶

なつやす ひ わたし かぞく い
夏休みのある日。私は家族と行った旅行先で視覚に障がい
を持つ方に出会いました。私たちは買い物を買ませ、食事をし

ようとフードコートのある店舗の前で列に並んでいました。

しよくじ もくてき ひと わたし ほか おおぜい
食事を目的としている人は、私たちの他にも大勢います。だから、フードコートは多くの人でごった返してしまいました。そんな中で彼女は、白杖を手に前に進もうとしていました。しかし、

はくじょう ほか ひと あ
白杖が他の人に当たったり、通行人と体がぶつかったりして、

まともに歩けない状態でした。彼女が困っていることは明らか

でしたが、「どうしよう」という思いが先に立ってしまい、手を

差し伸べることをためらってしまいました。すると、一人の女性

が彼女に「どこに並びたいんですか」と声をかけました。彼女は

ほっとしたような表情で、私たちと同じ列に並びたいと答え

ていました。それを聞いて、私は並んでいた場所を空けました。

彼女は、「ありがとうございます」と言っ、列に並ぶことがで

きました。

わたし しかくしやう しや であ はじ
私は、視覚障がい者と出会ったのは初めてだったので、助け

たいけれど何をしたらいいのかわからず、もどかしい思いをし

ました。結果的に列を譲ることができましたが、初めは体が動

きませんでした。そんな私とは逆に視覚障がいを持つ彼女に、

最初、声をかけた女性は、優しいだけじゃなくとても勇気のある人だと思っています。

困っている人に出会っても、どうやって誘導すればいいのか、何をしたらいいのかと、頭の中ではグルグルと思考していても、実際に行動に移せない人は、私の他にもたくさんいるのではないのでしょうか。

私は、福祉について学べる機会がほしいと思いました。例えば、学校で福祉についての講話や障がいを持つ人たちの感覚がつかめるような活動ができると思います。そういう機会があるだけで、困っている人と出会ったとき、相手が求めていることを理解し行動に移せると思うのです。あのときの私のように、「どうしたらいいかわからない」と、もどかしさを感じることがなくなると思います。

去年のことですが、友達と街を歩いていると、重い荷物を持っていて歩きづらそうなおばあちゃんを見かけました。瞬時に「助けなきゃ」と体が動きました。私は、おばあちゃんに声をかけ、代わりに荷物を運ぶことにしました。おばあちゃんは、にっこり笑って「ありがとう」と言ってくれました。そのとき、「声をかけてよかった」「代わりに荷物を運んでよかった」と思いました。おばあちゃんに「ありがとう」と言ってもらえたこと、とっさに状況を判断して行動できたことが嬉しかったです。その日は、一日中気持ちよく過ごせたことを覚えています。この出来事を思い出したとき、困っている人に手を差し伸べることができると自分に気づきました。今度、困っている人を見かけたらためらうことなく「何か手伝えることはありませんか」と声をかけたいです。

わたしが生活する社会は、一人で生きていくことはできません。自分で自覚していなくてもどこかで誰かに支えられて生活しているのです。障がいがあったり、年をとったりすると、どこかで誰かに支えられる機会が増えるでしょう。私自身、今は健康に生活していますが、将来、大病を患うかもしれません。障がいをもつことになるかもしれませんが、もちろん、確実に年を取っていきます。そうなったとき、「どこかで誰かに支えられている」と思えるといいなと思います。そして、あの白杖の彼女やおばあちゃんのように「ありがとう」と感謝の気持ちを伝えたいです。

助け合い、誰もが安心して過ごせる社会を目指して、私も自分ができることによって貢献していきたいです。